口腔の役割

甍(いらか)の波と雲の波

「甍の波と雲の波」は童謡“鯉のぼり”の歌詞の冒頭。男児が鯉のぼりのように雄大に成長するようにという願望を歌っています。甍とは瓦(かわら)のことであり、鯉が滝を登って竜門をくぐると竜になるという伝説(登竜門)から来ています。

ところでこの鯉ですが、もともとコイ科の魚には口の中に歯がありません。捕食の時には吸い込むように食べるので、必要ないのです。その代わりに、のどに歯があるため、のどで咀嚼(そしゃく)していることになります。ですからこの歯を咽頭歯(いんとうし)と言います。パクパクしている丸い形の口も、物を吸い込むには掃除機のホース同様、抵抗が少なく、とても効率の良い形で実に合理的です。この童謡の 2 番では大きな丸い口に空気をたくさん吸い込み、青空を元気いっぱい泳いでいる情景が思い浮かびます。

もともとこの鯉のぼりは江戸時代中期の裕福な庶民の家庭で始まった習慣と言われています。大きな経済力を身につけながらも社会的に低く見られていた商人の家庭では、武士に対抗して豪華な武具の模造品を作らせ、のぼりの代わりに五色の吹流しを飾るようになり、さらに一部の家庭では「竜門」の伝説にちなんで男児の立身出世を願い、吹流しに鯉の絵を描くようになったのがこの習慣の始まりとされています。

日本の風習のスケッチ(1869 年)より

口から空気を吸い込むということでは同じ時代、西洋では人間の身体は家に例えられ、家の戸口、すなわち口腔は、几帳面に清潔を保ち、きれいな空気を取り入れることで健康を維持できるという記述があり、現在でいう口腔ケアがすでに存在していたということになります。

鯉をモチーフにした鯉のぼりに家の戸口。洋の東西で発想こそ異なりますが、口から空気を吸い込むことでさえ、昔の人の知恵には感心させられます。

ユダヤ神学校(アメリカ)の書物(1717 年)より

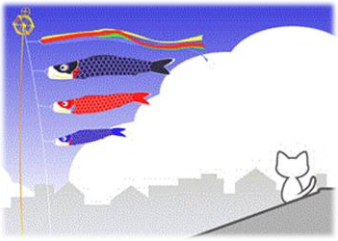
鯉のぼり

弘田龍太郎
1914年（大正3年）

1
甍の波と雲の波
重なる波の中空を
橘かおる朝風に
高く泳ぐや 鯉のぼり

2
開ける広き其の口に
舟をも呑まん様見えて
ゆたかに振う尾鰭には
物に動ぜぬ姿あり

3
百瀬の滝を登りなば
忽ち竜になりぬべき
わが身に似よや男子と
空に躍るや鯉のぼり



【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】